



世田谷文学館友の会

会報 第64号

2023年12月12日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南鳥山1-10-10
世田谷文学館内
FAX 03-5374-9120
ホームページ
<https://setabuntomo.net/>

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催講演

歌人 穂村弘氏

覚えておきたい究極の短歌

鈴木 マキコ

台風がタイミング良く過ぎた九月九日(土)、
たくさんの方がご来場下さいました。今回は
いつもより一般参加のお客様が多かったよう
に思います。ある方は「ここでもいいのかな？」
と不安気に入館し、受付の貼紙の「穂村弘氏」
の文字にほっとなさり、「あつ、こっちだわ」
と一般受付へ早足で向かわれました。そこに
「楽しみに文学館に来ました！」という気持ち
を感じました。

実際に短歌を作る方、穂村さんのファン、
短歌をよく知らないけれど、お話についてい
けるかな？ 会場にはそんな様々な方の「よ
ーし、究極の短歌を知りたい」という期待が
満ちていました。

■全員一致は三首のみ

今回配付された資料は二種類、一つはNH
Kの番組で使われた「究極の短歌50選」「究
極の俳句50選」と、穂村さんが講演のため
に作って下さった「覚えておきたい究極の短
歌」です。あれ、タイトルが似ています。

「NHKから、飛鳥時代から平成までの千四
百年を通して五十首選んで欲しいと依頼され
ましたが、そんなの無理だよ。責任、重
い。『覚えておきたい短歌』だ」といいと思いま
したが、それだと引きが弱くて『究極の短歌』

自分の資料は『覚えておきたい究極の短歌』
にしました」

無理なことは無理と言う、でも、相手の言
い分も受け入れる。お人柄が伝わります。

五十首の選者は、穂村さん、栗木京子さん
(歌人・現代歌人協会理事長)、渡部泰明さん
(国文学研究資料館長)の三人で、三人が一
致して選んだ短歌は三首のみでした。

熟田津(にきたつ)に船乗りせむと

月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田王

白鳥(しらとり)は哀しからずや空の青

海のをそにも染まずただよ

若山牧水

君かへす朝の舗石(しきいし)さくさくと

雪よ林檎の香のごとくふれ

北原白秋



解りやすく語られる歌人・穂村弘氏

2023年9月9日 於：世田谷文学館

各時代で「誰」を選ぶかは比較的すんなり
決まっただけで、どの「歌」にするかが大変
だったそうです。

「NHKの番組では『究極の俳句50選』も
同時放映されたのですが、それを見た時、大
変ショックを受けました」

え、穂村さんがショック？ それは何？

「五十句しか選べないのに、芭蕉の句が冒頭
三句も入っている(古池や蛙飛こむ水のをど・
閑さや岩にしみ入蟬の声・荒海や佐渡によこ
たふ天河)。短歌の場合、五十首と言われれば
五十人を選んで一首ずつにする。でも俳句は
違う。俳句を始めた芭蕉は、絶対の存在なの
だと思っ」

そう言われれば、確かにそうです。

■短歌と和歌とは違うんだ！

「じゃあ、短歌は誰が始めたか？」

はい、それは誰ですか？ 知りたい。

「俳句の三倍以上むかしからあって、微妙に
神様が始めたのかもしれない。短歌にはその
意識がある」

え、神様？

「柿本人麻呂だって、今でいうならコピーラ
イターみたいなもので、クライアントの天皇
が『こういうことを言ってよ』と頼んだ内容
を歌にしている」

あらま、そうなんですか？

東(ひむがし)の野にかぎろひの立つ見えて
かへり見すれば月かたよきぬ

柿本人麻呂

「これは自然を歌にしているように見えるけれど、天皇に成り代わって祈っているのです」と、おっしゃいました。そもそも、和歌と短歌の違いをみなさんご存じでしたか？

「近代では、自分の心を歌う。それ以前は、個人の思いではなく、その時代のみんなを代表して神に祈りを捧げている」

ですから、柿本人麻呂の歌は「短歌」ではなく、「和歌」なのです。

額田王の歌に出てくる「熟田津」ですが、「現代人にとって、この地名は謎の呪文だよ。かっこいい。魔力がある。人は自分から遠い物を神秘的に思ってしまう」

のだそうです。和歌・短歌を口にする、そこには文字を目で追うだけでは感じられない、言葉の持つ力が出現する。

■「命」に対する集中力

穂村さんのお話をうかがい、わたしたちは電気のある生活をしている現代人なのだ、と改めて意識しました。闇が本当の闇だった時、蛍や月、星のあかりをどんな気持ちで見たのか。恋の歌でも、相手が自分の夢に出てくるのが大事と思われたそうです。恋のパワーが違いすぎる。でも、その時代の和歌を、二十一世紀のわたしたちが鑑賞している。それが不思議で面白いです。

講演中、穂村さんは「うだよね」「うじゃん」「うだよ」という話し方をされ、短歌をほめる時も「しびれる」「かっこいい」「たまらん」「あこがれますね」と、おっしゃいました。そこには、その短歌に対してもう反射的にそう言うしかない、というストレー

トなお気持ちを感じました。

例えば先にあげた白秋の歌には、「すてきですよ。どんだけロマンチストなんだ。やられてしまう。胸を撃ち抜くよね」

「雪と林檎の飛躍に、『はっ』とさせられる。雪の白さと冷たさ、林檎の味と香り、そしてさくさくという響き。視覚、触覚、味覚、嗅覚、聴覚という五感の要素がこの歌には入っている」

短歌の作り始めだと、視覚ばかりの歌になりがちだそうです。確かにこの歌は五感に響きます。

「歌人は本当に不倫が好き。この歌も相手が隣家の人妻で、この後白秋は姦通罪で牢屋に入る。でも、この歌は百年前のもので、今も残っている。牢屋に入らないから、こういう歌が出来ないのか。歌が百年残るなら牢屋に入ってもいいかも」

まあ、そうですか。歌人って大変ですね。穂村さんの歌の説明は当然面白いのですが、間に入る生の言葉が大変面白いのです。

「短歌には、コントロール不能のところがある。普通の感覚ではないゾーンにいる人に、短歌の神様は恩寵を与える」

「死刑囚はいい短歌を作る。それは技術ではなくて、命に対する集中力が圧倒的に違うから。最も弱い者が、短歌を最強の武器にする。思春期の人、中二病、獄中にいる人、そしてボケている人。ぼくの知り合いの歌人に、ある人が『皆、わたしの旦那さんは、もう亡くなったって言うんですけど、先生、それは本当ですか？』って聞くんだそうです。そんなことを知る訳ないじゃない。でも、その方はそういう意識の中で短歌を作っている。びっくりするよね。現実の世界では、お金と体力がある人に価値をみるけ

れど、短歌では逆転する」

「代表歌は若い時の作が、ほとんど。残酷だね。脳がぐっぐつしている時のものなんだね」

「歌人はだいたい髪が多くて、うねってツヤツヤしている。それに長生きだよ。演劇好きも多いし」

「短歌と着物に似ている。着物には着物警察というこわい人がいて、突然、お太鼓の形がどうの、着丈がどうのと、難癖をつける。定型だから批判される」

■セーラー服の高校生

「短歌は時間が閉じ込められている動画のようだ」「他人の恋の歌を、『のろけを聞かされているようで苦痛だ』と言う人もいます。もうそれはリミッターを振り切ったものと思つて、こわいもの見たさのホラーと思えばいい。人間は一体どこまで行けるものなのか、と見守ればいいのです」

「天才は一人いてもだめ。同じ位の天才がいるから魂が共鳴しあえる。将棋の藤井君が心配。一人だけ強いのは、かわいそう」

解説もお話もずっと聴いていたかったです。和歌、短歌の背景、歌人の特徴、その嗜好をわかりやすく教えて下さいました。短歌をもっと知りたい、歌集をどんどん読みたいと思いました。

講演の最後には、エッセイ集『短歌の友人』が十人に当たる抽選会がありました。最後の当選者は、質疑応答のコーナーで「今度授業で穂村さんのことを発表します」と、おっしゃったセーラー服の高校生でした。これも短歌の神様ならではの終わらせ方、という気がしました。

(友の会会員)

『三軒茶屋のツボちゃん』

佐久間 文子

今年六月、NHKで「よみがえる新日本紀行 高速度路下の人情通り 東京・三軒茶屋」という一九七八年に収録された映像が再放送されるのを、「ツボちゃんが好きそうだな」と思っただけで条件反射的に録画した。

ツボちゃん、坪内祐三は二〇二〇年一月に亡くなった文筆家で、私の夫である。三歳からずっと世田谷住まいで、彼がいたので私もこの四半世紀、三軒茶屋で暮らしてきた。

坪内は若いころ「東京人」という雑誌を編集しており、編集者をやめたあとも、テレビや雑誌で街の特集をこまめにチェックしていた。テレビの街特集は、たとえば豪徳寺の隣の街の店を豪徳寺として紹介したりする。そういうのを見ると、「そこは豪徳寺じゃない！」と叫ぶ、うるさいところがあった。

番組では、三軒茶屋と下北沢を結ぶ茶沢通りをさらに奥に入った下の谷地区をおもに取り上げていた。関東大震災で被災した上野や浅草の人たちが移り住んだといい、商店街には大正時代から続く蕎麦屋もある。

ぼんやり見ていたら、ふいに画面を牛が横切った。牧場？ もしかして？ 牧場主の名前が紹介されていたので、テレビを一旦停止してスマホで検索したところ、予想した通り四谷軒牧場の牧場主の名前と一致した。

四谷軒牧場は、坪内が通った赤堤小学校のそばにあった牧場だ。大阪生まれで東京をあまり知らない

私に、世田谷というと高級住宅地と思われるけど、ぼくが子どものころは小学校の隣が牧場で田舎だったと話していた。

牛をまつた「牛魂碑」があつて、というあたりからだんだん話が物語じみしてくる。背中に火のついた牛が校庭に逃げ込んで来たとも話していた。自分で見たわけではなく、先生から聞いたらしいが、まるで自分がこの目でみたかのように語るのだった。

そんなマジックリアリズム小説みたいな光景が高度経済成長期以降の世田谷で？ ほんとうに？ ちよくちよく話を盛る人だったので話半ばに聞いていたけど、思いがけず目にした四十五年前の映像は彼が話した場所そのもので、夜中にひとりテレビを見ながら、いま四谷軒牧場見たよ、あなたが言ったままだったよと、隣にいない人に話しかけた。

ところで四谷軒牧場の所在地は赤堤である。三軒茶屋から歩いて行ける距離ではない。ツボちゃんに日ごろ文句をつけられがちな街ブラ番組の三軒茶屋特集でも紹介しないぐらい離れたところにある。あの名高い「新日本紀行」が、たぶんテレビ的に面白いからという理由で、赤堤の牧場を三軒茶屋の一角にあるかのように紹介していたのはちょっと驚きだった。

彼が見たらどんな反応をしただろうと考えてしまう。やっぱり「赤堤は三軒茶屋じゃない！」と叫んだらうか。案外、懐かしい牧場を見られたうれしさで胸いっぱいになって、そんな細かいことはどうでもよくなってしまうんじゃないかという気がする。

執筆後紹介 文芸ジャーナリスト。大阪市生まれ。朝日新聞社退社後フリー。著書に『文藝戦後文学史』（河出書房新社）

『ツボちゃんの話 夫・坪内祐三』（新潮社）。世田谷区在住。

『わたしの一冊』 村上春樹著

『猫を棄てる 父親について語るとき』

文春文庫（二〇二二年十一月十日発行）

岩本 純恵

小説家・村上春樹氏が、自身の父の記憶や、父の戦争体験を語りながら、歴史認識の問題や、記憶を受け継ぐことの責務について静かに綴ったエッセイである。

まずは、少年時代に体験した不思議な出来事の回想から。父と自転車に乗って二キロほど離れた海岸へ行き、飼っていた猫を棄てたが、帰宅してみると、棄てたはずの猫が家を出迎えた。父の呆然とした表情が、ほっとした表情に変わる。この話は、かつて父と祖父との間で起きた、ある出来事とも重なっていて、それがなんともせつない。著者は次のように考察する。「人には、おそらくは誰にも多かれ少なかれ、忘れることのできない、そしてその実態を言葉ではうまく人に伝えることのできない重い体験があり、それを十全に語りきることのできないまま生きて、そして死んでいくものなのだろう」（39頁）

歴史や、小さな記憶を受け継ぐことの重要性についても、繰り返し書かれている。「歴史は過去のものではない。それは意識の内側で、あるいはまた無意識の内側で、温もりを持つ生きた血となって流れ、次の世代へと否応なく持ち運ばれていくものなのだ」（120頁）

凄惨な戦争体験をもつ父と、戦争を知らない息子である著者との間には、長年の確執があった。それゆえ尚更、冒頭の逸話が、かけがえのない共有体験として重要な意味を持つ。読後は、記憶のかけらを自分も確実に受け取った感覚が残る。高妍（ガオイエン）によるノスタルジックな挿画が、どこかほっとする。

（友の会会員）

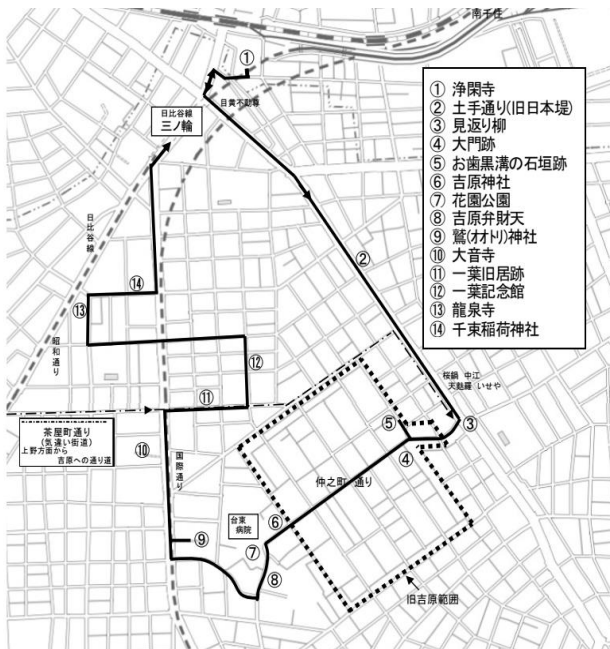
文学散歩『たけくらべ』が生まれた町を歩く

中村 千栄子

一葉を巡る散歩に参加したのは二度目です。前回
はちょうど一年前の五月、本郷でした。今回は一葉
の代表作、『たけくらべ』が生まれた町、竜泉を歩き
ました。本郷菊坂町から下谷龍泉寺町に引っ越した
とき、一葉は二十一歳。竜泉では十カ月ほど過ごし
ました。その後、終焉の地、本郷丸山福山町に転居
し、『たけくらべ』は執筆されました。

今回の散歩では『たけくらべ』冒頭に出てくる大
門、見返り柳、お歯黒溝、一葉も住んだ茶屋町通り
を歩きました。ここは物語の主な舞台です。それか
ら、主人公美登利の住んだ大黒屋寮の跡地も見まし
た。もう一人の主人公信如の住む龍華寺のモデルと
された大音寺も近くにあり、頭の中で描いていた町
を実際に歩いたようでした。その距離を体感できた
ことは、楽しいことでした。

『たけくらべ』の季節の移ろいは、千束稲荷神社
の盛夏の祭りの直後から、酉の市で賑う初冬の驚（お
おとり）神社までを背景に描かれています。そのふ
たつの神社はとも近い場所にありました。また、
浄閑寺、龍泉寺、吉原神社、吉原弁財天にも立ち寄
りました。訪ねたお寺、神社はどこもきれいに清め
られ、地域の方々から大切にされていると感じまし
た。『たけくらべ』の舞台となった下谷龍泉寺町は吉
原遊廓という特殊な地域で育っていく少年少女の物
語です。現在の台東区竜泉は令和の時代においても
歓楽の町です。この地には信仰と歓楽が、時間を経
た現在もありました。



巡った台東区竜泉界隈

今回の散歩では、一葉記念館にも行きました。企
画展「樋口一葉と和歌 ―かなの美―」では、一
葉の美しい流れるような自筆の和歌などが展示され
ており、興味深く拝見しました。「書くこと」を貫い
た一葉。その頃の文壇ではすでに言文一致体が席卷
していたにも拘わらず、雅俗折衷の擬古的文語体
を用いた一葉。揺らがない勁さが、一葉の文字からも
伝わってきました。一葉が小学生の時、初めて詠ん
だとされる和歌があります。お題は「筆」。

ほそけれど人の杖とも柱とも

思はれにけり筆のいのちも

この和歌を思い出しました。一葉を満喫し、『たけ
くらべ』を旅した散歩となりました。ありがとうご
ざいました。
(友の会会員)



5月14日の参加者 於：千束稲荷神社境内
ここから、不朽の名作『たけくらべ』の物語が
始まる。



5月12日の参加者 於：鶯神社
参道入口に「浅草西乃市起源発祥乃神社」の
碑が建っている。

世田谷文学館友の会講演

伊藤氏貴氏『樋口一葉赤貧日記』を聴講して

鈴木 真

伊藤先生のご講演、興味深く聴かせていただきました。特に印象深く心に残ったことは、なぜ言文一致体ではなく一葉が文語体にこだわったのかについて、売れるために小説を書く（先生は糊口の文学と言われました）ではなく、後世に残るような価値のある小説を書きたかったのだということでした。先生のご著書にもあるように「生きるために書く」ではなく、「書くために生きる」のだということだと思います。

これについては私も共感するところがあります。私事にわたり恐縮ですが、私は十年程、学習塾の講師として数学を教えておりました。私は教育というものとは、全人格な完成を目指すもので、教科指導はその一部であって、数学ができればよいというものではないと思っております。しかし実際は、公共教育と違って学習塾はサービス業であり、第一に成績を上げなければならないという事実があり、かなり悩んだことがあります。いわば「糊口的教育」とでも申しましょうか。そんな中では、人にもよりますが、なかなか自分で教える内容よりもレベルの高い数学を勉強する余裕もなく、私の場合は数学のよさを伝えることができませんでした。一葉も一時文学から離れ三ノ輪周辺で店を出しましたが、後から考えるとそれで社会性が身につiki、伊藤先生がおっしゃっていた、一葉しか書けない『たけくらべ』のような本物の文学を書けたのではないのでしょうか。

店を十か月で閉じ、収入は借金のみという中でも、「奇跡の十四か月」というような時期を経て大成したのだと思います。やはりお話を聴いて思ったのは、一葉の持っている芯の強さというものが影響しているのだということでした。

さらに驚いたのは、日記に「今日は誕生日なので魚を食べる」と書いてあるとのことでした。一葉の早世と貧乏の因果関係がはっきりしました。貧乏でなければ、もっと長く生きることができたのだということでした。現代に生きる私達にも身につまされることだと思います。



伊藤氏貴氏講演風景
五千円札を掲げ、お金と全く縁のなかった一葉だったと……。
2023年6月25日 於：世田谷文学館

私は一葉の作品を現代語訳でしか読んでいませんが、『たけくらべ』は吉原を中心とした町の物語で子供たちが中心ですが、暗いイメージはなく、子供たちの生活の様子が生きて描かれているのを感じることがができます。『ゆく雲』と『大つごもり』も現代語訳で読んだのですが、やはり一葉の広い視野を以ってして書かれた作品だと思いました。その他の作品も現代語訳で読みたいのですが、なかなか入手

が困難で残念に思っております。

借金を悪いこととは思っていなかったとのことですが、それでもやはり気持ちの上では、恋愛をする余裕はなかったのではないのでしょうか。吉原や銘酒屋の娼婦たちの手紙の代筆を引き受けていたのに、自分の恋しい相手には「兄のように」としか言えない初心な性格だったのでしょうか。戸主として母と妹を食べさせていかねばならないという事情もあったと思います。経済観念が全くなかったとは言っても、前述のように誕生日にしか魚を食べないといったところから、食費はだいぶ切り詰めていたのではないのでしょうか。店を出したときの駄菓子子供相手です、随分売れたそうです。もっとも、忙しくても生活をしていくのに充分なほどの収入はなかったそうですが、それでも忙しく仕事をしていたという体験が、『たけくらべ』の作品を完成させる要因になったので、私は売るための小説を書いて少ない収入のまま終わるよりも、三ノ輪での店を出した決断は成功だったと思います。先生のお話にもあったような当時の女流作家や、男性の作家には書けない作品を書けたのも、一葉の秘めたる大いなる志によるものだと思います。

（友の会会員）



世田谷文学館友の会講演
 深沢眞二氏『おくのほそ道』『むざんやな甲の下の
 きりぎりす』句を読む』を受講して

平出 洸

令和五年十月八日、世田谷文学館友の会の題記講演を受講した。『おくのほそ道』ファンの人として待ち兼ねていた講座であったが、期待に違わぬ興味深い内容であった。

芭蕉は加賀の小松の多太（ただ）神社で斎藤実盛の甲を見、「むざんやな」の一句を捧げた。芭蕉が見た実盛の遺品は「実盛（芭蕉は「真盛」と記す）が甲（正しくは兜・冑）・錦の切あり。往昔（そのかみ）源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給ふとかや。」とあるが、『平家物語』巻七では平宗盛に実盛が着用の許可を求め、宗盛が許した事になっている。当時七十三歳の実盛は白髪を染めて平家側の武将として木曾義仲軍と北陸で戦うも戦死、幼い時実盛に恩を受けたことのある義仲は其の遺骸を手厚く回向し、「木曾義仲願状にそへて」「此の社にこめられ」たのであった。

筆者が多太神社を訪れたのは昭和五十年代半ばのことであった。当時広島に単身赴任をしていた筆者は、家族を引き纏めるまでの間、中国一円の物見遊山の一環で同神社を一人で訪れたことがあった。何と言ってもその時の印象に残っているのは実盛の首実検で白髪染めを洗い落としたと称する池であった。勿論首も見ただけ記憶はあるが、何故かあまり印象に残

っていない。白髪を染めて奮戦、討ち死にしたというエピソードが余りにも強烈だったからであろうか。その後『平家物語』や『源平盛衰記』も愛読したが、広島時代の宮島は別として、直接遺跡を訪れる機会があまり無かっただけに、多太神社の記憶は今でも強烈に脳裏に残っていて、その意味でも今回の聴講は極めて有意義であった。



深沢眞二氏 講演風景
 芭蕉の「むざんやな」の一句について二時間熱く深く語られた。
 2023年10月8日 於：世田谷文学館

特に「きりぎりす」についての本講演での詳細な解説は、印象的であった。昆虫の「こおろぎ」の名で芭蕉の時代は「きりぎりす」が「こおろぎ」から「バッタ」にかわる直前であったが、芭蕉は古典和歌の用語を尊重する姿勢であったこともあり、「こおろぎ」の意味と解するのが妥当と指摘され、その鳴き声の録音をたづね聞かせて頂いた。

続いてこの句の「きりぎりす」の役割が諸説あることを紹介され、①実盛亡魂説②実盛の運命を語り手と共に嘆いているという説③その哀切な声と実盛最期の痛ましさを感覚的に取り合わせたとの説、を

紹介され、現在の主流は「きりぎりす」を「実盛の亡魂」と見る説だが、その他にも「きりぎりす」が実盛に同情しているとする説や「きりぎりす」と芭蕉を、実盛を慰霊する立場として同一視することに「安易で必然性がない」とする否定的な解もあるとのことであった。

講師の見解としては、能の『実盛』は「鬢鬚を墨に染め」若づくりして戦場に出て討ち死にしたとき、実盛が「鬢鬚を墨に染め」出陣したこと、きりぎりすの異名「筆津虫」を踏まえたのではないかとされている。興味深い見方ではある。

最後に「芭蕉は晩年になるにたがい、「きりぎりす」に魅かれていったふしがあり、(略)西行の影響を受けていたと思われる。」と纏められたのが印象的であった。
 (友の会会員)



実盛の兜／国重要文化財
 斎藤実盛が最期の時にかぶっていた兜と伝えられ、精緻で気品がある。
 (石川県小松市多太神社提供)

父との時間

神奈川県より

北村 暁子

この春、世田谷文学館友の会に入った。先日、入会を誘ってくれた会員の友人から、大学教授でドイツ文学者だったお父さまが遺された原稿をまとめた本、ドイツの思想家フランクの名著、初の日本語全訳という『パラドクサ』（教文館刊）をいただいた。

お父さまの大切なお仕事調査、編集、校閲して本を出版した友人を讃えつつ読み始め、その専門的な内容に、私は、牧師だった父と共に読みたかったと思った。独自の神秘哲学を説くフランクの聖書研究について、その位置づけや意義、日本の牧師としての読後感も聞きたかった——と、父を偲びつつページを繰り、胸に響く聖書の言葉を思い起こしていた。

父は私立高校の社会科の教師だったが、私が十歳のとき、牧師だった祖父が病に倒れたことで、実家の教会へ戻り、神学校に通って牧師になった。

母とは小学生時代から祖父の教会の日曜学校に通う幼馴染で、当時は、牧師にはならないと言っていて、若くして結婚、二人での生活を始めたとのことだった。教会というのは世襲ではないから、祖父の代わりに牧師になるというのは、定められた道筋ではなかったのだが、神学校を卒業し、祖父を助ける副牧師という役割から、父は実家の教会で伝道を始めた。

なぜ、牧師になることを決めたの？——私は、それを、ずっと訊きたかったのだが、現役のまま忙しい父はいつのまにか八十歳になっていた。私の仕

事も定年に近づき、互いに仕事を終えたら、ゆっくり話ができる、と考えていた。

父は五年前の八十一歳の冬、発熱して検査入院、その翌朝、心停止。敗血症との診断だった。

父が急に亡くなって、親と子が語り合えるタイミングは、それぞれの人生の時間の中で、なかなか持てないことなのだとわかった。

庭に綺麗な蝶が来ていると、父かしら、と思う。没後の夏から、そんなふうを感じるようになった。

今朝、紅萩が咲き始めた庭に、ひらひら舞い来た蝶に、思わず、「パパ」と呼びかけていた。

もっと話したいことがあった。（父娘共作の本）を読みながら、私は（あったかもしれない父との対話）を思い、礼拝堂で父が祈る声、オルガンを弾き讃美歌を歌う声を、久々に聴いていた。

（友の会会員）

世田谷文学館こぼれ話 3

開館前史

世田谷文学館学芸部 佐野 晃一郎

再来年に当館は開館三十周年を迎えます。歴代の館長や副館長、そして開設準備室長。基本構想検討委員会や運営準備委員会、収集委員会でご尽力いただいた方々。館設立に携わったあらゆる先人の記憶を留めたく、開館前史を振り返ります。

私は、平成四年の夏から非常勤職員として現職に合流しました。その年は、区の総務部文化課に初めて文学館開設準備*1の担当主査が配属された年でした。職場では、上司や前任の先輩から文学館準備に至る経緯を聞くことができました。市レベルの高

い行政サービスを目指す本区では、美術館はもとより文学館や音楽堂、映像文化センターや水族館などの設立プランも視野に入れていたこと。そして、いずれの施設も用地確保が課題だったことなどでした。美術館だけは都管轄の公園に区施設を建設するという難題を乗り越えて、昭和六十二年三月に開館しました。文学館については、同年十二月「世田谷文化会議」の提言*2に設立の要望が盛り込まれ、翌年の区の基本計画と実施計画*3では館の開設を目指すことが明記されています。その後、平成二年に株式会社ウテナの工場跡地一角が候補地として浮上すること、建設に向けた流れが加速します。同年十一月に「文学館基本構想検討委員会」が発足し、翌年十二月の委員会が答申した基本構想で、現在の世田谷文学館の骨子が決まるのです。

本題の「こぼれ話」は、上述の初期段階、基本構想検討委員会答申以前の話です。当時の想定では、職員は数人で平屋建、建物面積が現在の三分一の規模だったそうです。また一時期は、美術館や郷土資料館の収集対象から外れる文化資料を、文学に限定せずに収集する「世田谷区民文化館」（仮称）としての構想プランもあったそうです。今でこそ、文学を軸にマンガ、映画、美術、デザイン、音楽など近接する諸分野も視野に入れて、横断的に特色ある企画を展開する世田谷文学館ですが、その原型は開設前史の昭和時代に垣間見ることができるのです。

*1 専属の部署である文学館開設準備室は平成五年設立

*2 「世田谷文化会議（特別会議）提言 二十一世紀の

『文化市』世田谷をめざすために」（23頁より）

*3 「世田谷区基本計画」及び「同実施計画」（昭和六十二年七十一年度版）

ヨソの文学館・記念館 【大佛次郎記念館】

横浜山手の港の見える丘公園のローズガーデンを前に立つ瀟洒な煉瓦造りの二階建ての洋館が「大佛次郎記念館」である。春と秋には、豪華なバラが咲き誇る。入り口では黒い猫の彫像が迎え入れてくれる。入るとすぐの吹き抜けの広間は、今年二月の訪問時は猫の写真展を開催中だった。階段を上がると右手は図書室で、大佛次郎の書籍に、執筆のために集めた資料の山、大佛次郎賞の受賞者の書籍等があり、自由に手に取って読むこともできる。

大佛次郎というとなまずは『鞍馬天狗』などの時代小説か、『天皇の世紀』などのドキュメンタリを思い浮かべるかもしれないが、私にとつては猫のイメージが強い。懐かしい童話『スイッチョねこ』を手にする。

二階左手の展示室では企画展「美術の楽しみ」を開催、大佛次郎所蔵の絵画等を展示していた。

その先の常設展示室の一室は寝室を模した部屋で、百貨店に特注したというベッドを囲む書籍の山と、たくさんの猫の置物が目を引く。大きな机には直筆の原稿や手紙があった。鎌倉の家から持ってきたというソファセットも。丸い天井のステンドグラスからは、柔らかな光が降り注ぐ。写真に写る旧グラランドホテルから港を望む大佛夫妻の眼差しは、明治の「開化」の横浜を見据える。それにしても、何かが足りない。そうだ猫、生身の猫だ。大佛次郎が来世にと望んだ身体の細長い白い猫が本棚の上から「うろろろ、るあん」と覗き込むのだ。遠い異国の図書館のように。

所在地 横浜市中区山手町一一三番地
電話 〇四五―六二二―五〇〇二
入館料 二百円(休館日 月曜日)

(友の会会員 坂田美代子)

～こういう催しがありました～ (2023年5月～2023年10月)

月 日	講演・講座・散歩	講師・案内人
2023 年 5 月 12 日 5 月 14 日	新春散歩 『たけくらべ』が生まれた町を歩く ～ 台東区竜泉界限・一葉記念館 ～	友の会スタッフ
6 月 25 日	友の会講演 伊藤 氏貴氏 『樋口一葉赤貧日記』	伊藤 氏貴氏 (明治大学教授)
9 月 9 日	世田谷文学館・友の会共催講演 穂村 弘氏 覚えておきたい究極の短歌	穂村 弘氏 (歌人)
10 月 8 日	友の会講演 深沢 眞二氏 『おくのほそ道』『むざんやな甲(かぶと)の下 のきりぎりす』句を読む	深沢 眞二氏 (国文学者、東洋文庫研究員)

編集後記

私が初めて書いた小説は、小学生の時に書いた『夏の霧』という作品です。恥ずかしいのであまり人に話すことはないけれど、実ははつきりと内容を覚えています。

ある夏の日、湖畔の岸から出航する小さなボートに乗った私と一人の少女。湖の真ん中につく頃には段々と霧は深くなつてゆき、その霧の中でなんと私は相乗りしていた少女を湖に突き落とし、何もなかったかのようにその場から離れて岸へと帰ってゆくという不条理な作品でした。一体全体どうして少女を湖に突き落とすなどという残酷な物語を書いたのか今でもよく分からないのですが、幼いころから何か人生の不条理を感じていたのは間違いない気がしています。

例えば私が初めて文学に意識的に触れたのは、井伏鱒二の『山椒魚』を読んだときのことでした。

「山椒魚は悲しんだ」の一節で始まる不条理かつ美しい物語。今でもこの物語を読むと、「寒いほど独りぼっち」に感じていた頃のことを思い出してしまいます。将来に対する希望と不安を抱えつつ過ごした日々、思い通りにはいかない進路、消えてしまいたくなる夜、どうしてこうなんだという嘆き。本当だったらもうこの世界から居なくなつてしまっていたかもしれない私が、今でも生きる希望を見出して日々を過ごせているのは、やはり文学のおかげだとおもうのです。

廻船孝行